



イヌワシの 棲む山

文：鈴木 卓也
絵：西澤 真樹子



立花繁信氏の自宅に飾られている翁倉山のイヌワシ親子のパネル写真。
1972年、東京上野で開催された「滅びゆくワシタカ展」に展示されたもの。
立花繁信氏撮影、撮影年不詳。

「イヌワシの棲む山」 発刊に寄せて

イヌワシについて児童たちに熱心に話される立花繁信先生のお姿は、当時小学生だった私の記憶に今も思い出として残っています。

この度、立花先生のご功績を広く、永く伝えるべく「立花繁信氏記念イヌワシ絵本作成・配布プロジェクト」が実施されますことは、立花先生の生前の活動を知る一人として誠にありがたく、関係皆様のご努力に敬意と感謝を申し上げますところです。

国の天然記念物に指定され、絶滅危惧種のイヌワシは、南三陸町の象徴「町鳥」でもあります。今後におきましても、イヌワシが暮らす豊かな自然を守り、後世に受け継ぐべく「森里海ひといのちめぐるまち 南三陸」の具現化に向け進んでまいりたいと考えておりますので、町民皆様・関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

佐藤 仁（南三陸町長）

南三陸町の社会科副読本「わたしたちの南三陸町」の1ページ目に「町鳥 イヌワシ」の勇敢に飛ぶ写真が掲載されています。自然豊かな南三陸を象徴する貴重なイヌワシの姿。将来、社会に飛び立つ南三陸の子どもたちに、思いっきり自分の力を発揮し、自信を持って生きてほしいという願いが重なります。

近年、残念ながらイヌワシの姿は見られなくなりましたが、この絵本は、自然と共存することの大切さに気付かせ、「またいつの日か、本物のイヌワシの雄姿を子どもたちに見せたい」と強く思わせてくれる作品です。

齊藤 明（南三陸町教育委員会 教育長）



イヌワシの棲む山

文：鈴木 卓也

絵：西澤 真樹子

四年生の春、集落を見下ろす山^のてっぺん^の祠^{ほくら}に、タックくんは
じいちゃんに連れられてはじめて登^{のぼ}ってきました。
途中^{とちゅう}は木^けがしげって景色^{しき}が見えませんでした^が、祠^{うし}の後ろ^{うしろ}、
大きな杉^かの木^{はら}のまわりはきれいに刈^かり払^{はら}われていて、
見下ろすと家や学校がおもちゃのように小さく見えて、
その先には海が光っていました。

「じいちゃん、ここ、イヌワシがいる山だよね？
今日、見られるかな？」

「見られ^よっと良いけどな。
じいちゃんももうずっと見てねえんだ。山^のようすが
昔^{むかし}とすっかり変わってしまったからな」

「変わった？ どんなふうに？」

「いまじゃ山に木があるのはあたりまえだけど、昔はこんなびっしりじゃなくてな。草原^{くさはら}がたくさんあった。木がしげらないように、良い草^{おが}がいっぱい育^もるようになって、春にわざと火を入れて燃^もやしたりしてな。そういう山を草生山^{くさぎやま}と呼んで大事^{だいじ}にしてたよ」

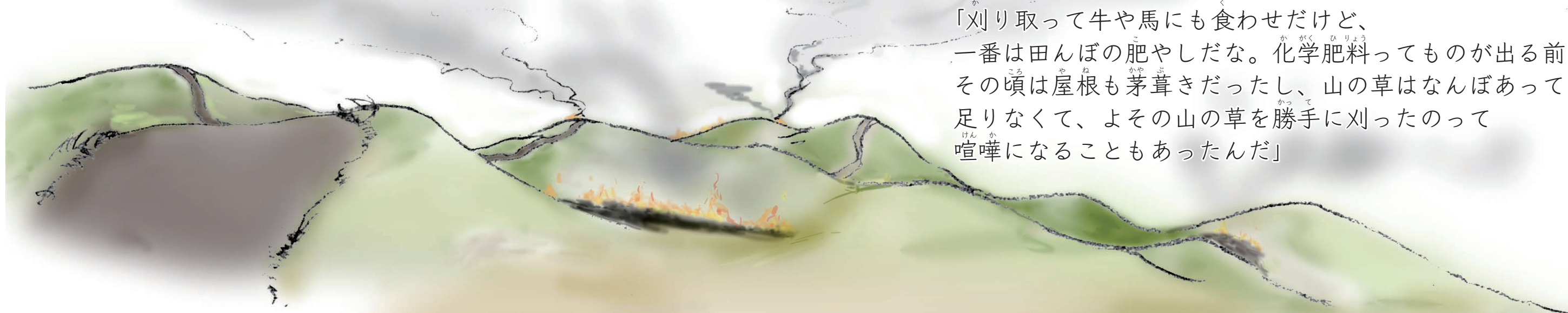
「それ、大丈夫なの？ 山火事にならない？」

「余計なところに燃え広がらないように、境^{さかい}を掘^ほっくり返してぐるっと囲ってたけど、それでも間違^{まちが}って山火事になることもあったな」



「なんで草原にしてたの？ 牧場？」

「刈^かり取って牛や馬にも食^くわせただけど、一番は田んぼの肥^こやしだな。化学肥料^{かがくひりょう}ってものが出る前な。その頃^{ころ}は屋根も茅葺^{かやぶ}きだったし、山の草はなんぼあっても足りなくて、よその山の草を勝手^{かって}に刈^かったのって喧嘩^{けんか}になることもあったんだ」

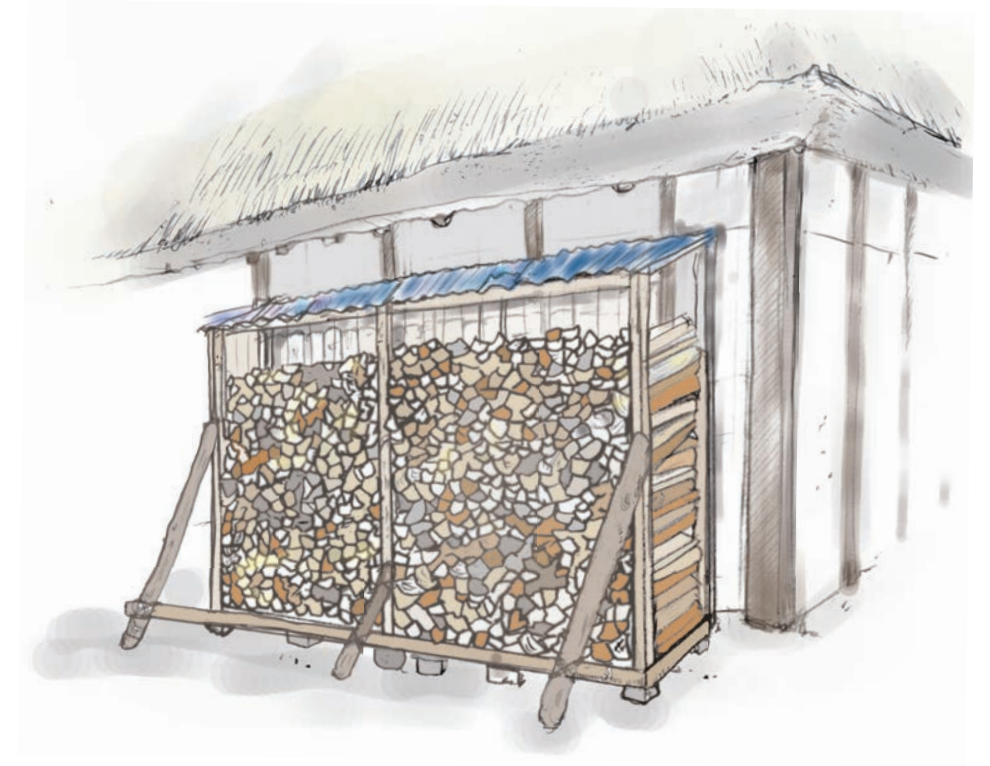


「^{ぞう き やま}雑木山^{だれ}だって、いまじゃ誰も伐^きらないけど、
昔は薪^{たきぎ}や炭^{すす}を作るための大事な山でな。
冬に田仕事^{たしごと}がなくなると、
みんな山に入って
雑木^{すみ}を伐^やって炭^{すす}を焼いたんだ。
炭^{すす}焼き窯^{かま}のわきに小屋^たを建てて
寝泊^{ねと}まりしてな」



「家に帰らないで、山に泊まるの？」

「炭^{すす}は高く売れたから、みんな頑^{がん}張^ばったんだ。
もったいないからって自分の家じゃ炭^{すす}でなく薪^きを使ってな。
家の前に木小屋^{のき さき}を組んで、
どこの家でも軒先^{のき}まで薪^きを積み上げてたもんだ。
それがいまじゃプロパンやら灯油^{とうゆ}やらで、薪^きを燃^もやしてご飯^{はん}を
炊^{あたた}くとか暖^{あたた}まることなんてまるっきりなくなったけどな」





「昔は家を建てるにも地元の杉や松を使ったから、伐れば良い値で売れた。もっとも植えて育てて売れるようになるまでまず50年や60年にかかるから、じいちゃんが植えて父ちゃんが育てた杉をタックンが売ってお金にするみたいな話だけだな」

「じゃあ、僕がいま杉の木を植えても、売れるのは僕がじいちゃんぐらいの歳になってからってこと？」

「そういうことだな。
もっとも昔は草生山も雑木山も大事だったから、
いまみたいに杉山ばかりじゃなかったけどな。」

トタン屋根とか石油ストーブとか、
便利なものが出回って、
草や雑木が見向きもされなくなって、

その後一生懸命
杉や松を植えたんだけど、

それも外国から木材を買った方が安いってんで、
せっかく大きく育ったのに伐られずに
放っとかれちゃってるわけだな」





「それでな、ここからが^{かんじん}肝心なところだけど、
イヌワシって鳥は、草生山のように
ほとんど木が育っていない山がいっぱいないと
暮らしていけない鳥なんだ」

「え？ そうなの？」

「なにしろでかくて立派な鳥だからな。
草原みたいなひらけた場所^{ばしょ}で狩りをするのは得意だけど、
森のなかを自由自在に飛び回^とるようにはできていない。

ノウサギやヤマドリが獲物^{えもの}だけど、
森に逃げ込まれたらもうダメだ。
餌^{えさ}が獲れなきゃヒナも育て^{そだ}てられないし、
いなくもなっちゃうよな。

イヌワシが日本で暮らしてこられたのは、
先祖代々おれたちが
山の木や草を上手^{じょうず}に利用^{りよう}して、
開けた山の環境^{かんきょう}を作ってきたからさ」



いつになく強い^{こわいろ}声色のじいちゃんに、
タックンはおそるおそる言いました。
「山の木を伐ったから
イヌワシがいなくなったって書いてある本もあったよ…」
「そういうこともあるのかもしれないけど、
少なくともここじゃ^{あやうく}逆だなあ」

「……。」
うつむいてしまったタックンの目をのぞき込むようにして、
じいちゃんが言いました。
「タックン、昔の山のようす、見に行くか？」

よくわからないままにうなずき返すと、
じいちゃんは立ち上がり、
ニッと笑って^{わら}タックンの^{りょうかた}両肩をつかみました。

すると急に^{けしき}景色が動いて、
次の瞬間には^{しゅんかん}じいちゃんに抱きかかえられたまま
祠の杉のてっぺんにいました。
いつのまにか^{やまぶしすがた}山伏姿になったじいちゃんの背中には
大きな^{つばさ}翼があり、その姿はまるでイヌワシそのものでした。



^{りょうよく}両翼をいっぱい広げたじいちゃん^{てんぐ}天狗は、
杉のこずえから風に乗って
ふわりと飛び立ちました。



くるりと輪^わをえがくたびに
時間^{じかん}が巻き戻^まされていくようで、

景色は冬から夏へ、
また冬へと何度も繰^くり返^{かえ}し、

気がつくとタックんたちは
空のずっと高いところを
飛んでいるのです。

見下ろす山肌^{やまはだ}は朝露^{あさつゆ}を浴^あびた小さな花が咲き乱れる
草原で、それがずっと遠くまでかすんで消えています。

じいちゃん天狗がゆっくり羽^はばたくと、冷たいけれど
心地^{こち}の好^よい風がタックんの頬^{ほほ}をなでます。

「じいちゃん、すごい！
ホントすごいよ、じいちゃん！」

その声にこたえるように、
じいちゃん天狗は急降下^{きゅうこうか}をはじめました。
ものすごいスピードで、息^{いき}がつまったタックんが
思わず目を閉じると……

「タックン、起きろ、タックン。
こんなことで眠^{ねむ}ったら風邪^{かぜ}ひくぞ！」
じいちゃんに肩^{かた}をつかまれて、タックンは目をさしました。

「あれ…？ なにいまの……夢？」

ぼんやりした心地のままじいちゃんを見上げた視線^{しせん}の先に、
空の高いところを飛ぶ大きな鳥のかげが目に入りました。

「ああっ、じいちゃん、あれ、あれ！」

「うん？ … ありゃ、なんとんと、
ありゃ間違^{まちが}いなくワシだな。
羽^{はね}と尾^おっぱに白いマークがあるから、若いイヌワシ^{わか}だ。
まだちゃんとこの山にいたんだなあ！」



その姿^{すがた}が北の空にとけこんで見えなくなるまで、
ふたりはずっとその若いイヌワシを目^めで追^おい続^{つづ}けました。

イヌワシが見えなくなってしばらくたってから、
タックくんが勢い込んでじいちゃんにこう言いました。

「じいちゃん、じいちゃん！
来年も再来年も、僕が中学生になっても大人になっても、
一緒にまたこの山にイヌワシを見にこようね」

「ああ、それは良いなあ」

やさしい顔をして、じいちゃんは答えました。



「タックくんがおとなになってもじいちゃんになっても、
タックくんみたいな子どもだちいっぱい連れて、
イヌワシに会いに登ってきてけろな……」



「じいちゃん、楽しみに待ってっつお！」

日本のイヌワシ

鈴木 卓也（すずき・たくや）

南三陸ネイチャーセンター友の会会長

翼を広げると2メートルに達することもある大型猛禽、イヌワシ。日本の山の生態系の頂点に位置するこの鳥がいま、危機的な状況にあります。日本イヌワシ研究会のデータによると、この30年で繁殖ペアの3割が消失。繁殖成功率も下がり続けており、生息数は全国でわずかに500羽以下と推測され、文字どおり絶滅が危惧されています。

東北地方、特に北上山地はイヌワシの一大棲息地でしたが、ここでも減少は続いており、南三陸地域で確認されていた4ペアは、ペアとしての定着が見られない状態にまできています。

急激な減少の一番の要因とされるのが、山の環境の変化です。イヌワシは草原など開けた空間での狩りに適応しており、森林の鳥ではありません。草山や伐採地など、人が山に手を加えることで生じる開けた空間で、ノウサギやヤマドリを狩って暮らしてきました。

草山や薪炭林の利用が少なくなり、林業不況で人工林の管理がなされず、木々で覆われてしまった山では、イヌワシは狩りができず、ヒナを育てられません。

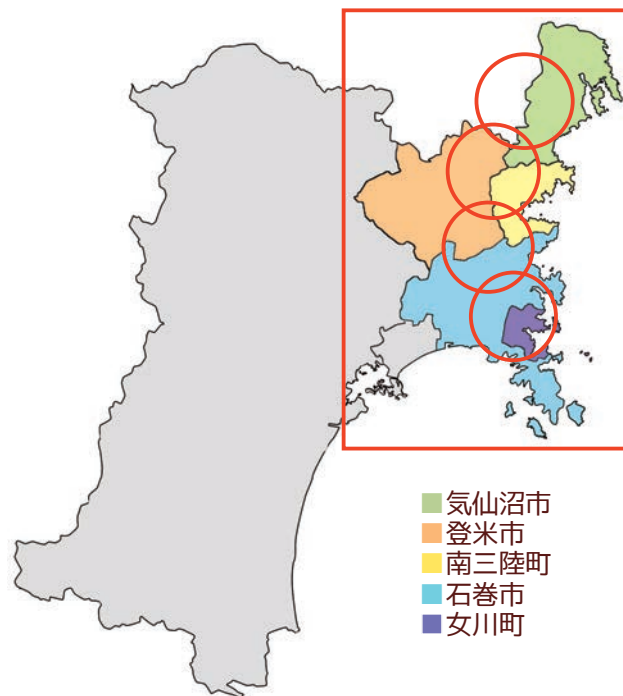


図1：南三陸地域の現在の市と町。
赤丸はかつてのイヌワシ4ペアのおおよその位置

ことはイヌワシだけに留まらず、開けた山の環境を好む動植物たち全般が減少しています。人が山の自然を上手に使わせてもらうこと、人と山との親しい関係性が維持されることが、イヌワシをはじめとする多くの動植物種の保全に繋がります。日本のイヌワシは、孤高なる山の王者ではありません。私たちの営みのそばで暮らしてきた隣人でした。

古くからの隣人を失わないために、人と山との古くて新しい関係性の再構築がいま、求められています。

南三陸地域の移り変わり

南三陸地域は4つの郡にわかれていました。本吉郡(1-16、41)、登米郡(17-32)、牡鹿郡(33-40)、桃生郡(42-56)です。そのなかにたくさんの町村が置かれ、合併を繰り返しながら現在の姿へと変わってきました。この地図と表で、その歴史を追いかけてみましょう。

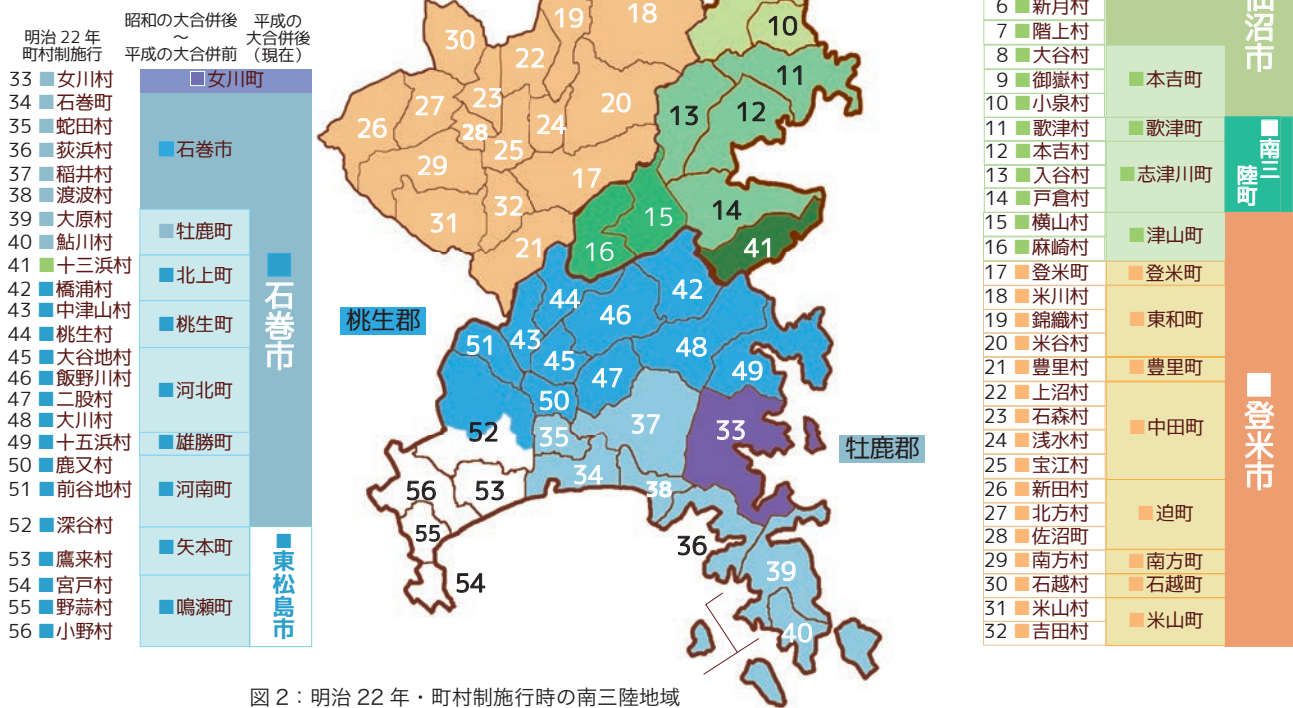


図2：明治22年・町村制施行時の南三陸地域

本書では宮城県の北東部、北上山地を内包する気仙沼市、登米市、南三陸町、石巻市及び女川町を「南三陸地域」と呼んでいます。旧郡では本吉、登米、桃生及び牡鹿の各郡に相当します。現在の東松島市は北上山地に接していないため、厳密には南三陸地域に含まれませんが、旧桃生郡の一部であることから、図及び表に加えてあります。現在では東松島市を加えて6市町しかありませんが、平成の大合併前には24市町、明治22年の町村制施行時には56もの町村に分かれていました。ここでは省略しましたが、江戸時代まで遡るとなんと188もの村と浜とに細かく分かれており、時代が下るほどに合併が進んでいったことがわかります。皆さんがお住まいの地区名や学校名に、古い町村名が残されていることも多いと思います。

南三陸地域の林業

佐藤 太一（さとう・たいいち）株式会社 佐久／南三陸森林管理協議会

林業でも重要な南三陸地域

あまり知られていませんが、実は、宮城県は林業も盛んな県です。2011 年には東日本大震災の影響で素材（丸太）生産は一時的に減少しましたが、その後順調に回復し、2018 年度に 614,000 m³となりました。これは 47 都道府県中、第 10 位の数字です。その県生産量の 30% 以上を南三陸地域（登米市、石巻市、女川町、気仙沼市、南三陸町）が担っています。

宮城県は素材需要量・国産材需要量も全国 5 位で、木材の加工も盛んです。特に、石巻市・登米市は丸太の需要が多く、石巻市の合板（ベニヤ板）工場は、国産材合板の製造をいち早く手がけ、国産材自給率を支えています。こうした加工の技術により、漁業で有名な南三陸地域は、林業でも重要な場所であり、宮城県だけでなく東北の林業を支える拠点となっています。

FSC マーク。厳しい国際基準をクリアした製品につけられる。

持続可能な林業への挑戦

南三陸町は、古くから良質な杉が育つことで有名でした。2008 年頃からは「南三陸杉」と名づけ、ブランド化を目指してきました。東日本大震災により町は大きな津波被害を受けましたが、山はほぼ無傷で残りました。町内面積 77% を占める山林は、町の復興に重要な役割を担うと認識され、持続可能な林業を目指す動きが始まりました。「持続可能な林業の構築」と「南三陸杉のブランド化」。この 2 つのテーマを掲げ取り組んだのが、FSC® 認証の導入です。

FSC は、独立した国際非営利団体である FSC（Forest Stewardship Council®、森林管理協議会）が定める認証システムです。「環境保全の観点から適切で、社会的な利益にかな、経済的にも継続可能な責任ある森林管理」に必要な国際基準を示し、それに照らして第三者機関が審査を行います。FSC は、世界で最も信頼されている森林認証です。

この国際基準に対応しつつ、南三陸町の林業経営を話し合う場として、町と複数の森林管理者が集まり、2015 年 5 月に南三陸森林管理協議会を創設。同年 10 月に県内で初めて FSC® 認証を取得しました。



南三陸杉の丸太

登米市でも、2016 年に登米市森林管理協議会が設立され、FSC 認証を取得しました。登米市は、素材生産量県内 3 位の大産地であり、木材加工にも力を入れています。FSC 認証は宮城県の林業の大きな特長となりました。

さらに気仙沼市では、震災後に気仙沼地域エネルギー株式会社が設立され、自立した再生可能エネルギーを地域の木材から作り出すことに成功しています。木質バイオマス発電の燃料になる木材の安定供給を図るため、山林の所有者や地域住民が山に入って自ら木を切り出す「自伐型林業」が進められています。林業で働ける人を増やし、エネルギーが地域内で巡る仕組みを作りだしたことで、「宮城県主催令和 2 年度ストップ温暖化賞」を受賞しました。このように南三陸地域の林業は震災後、持続可能性や環境保全と生産の両立を目指して大きく前進しています。

イヌワシが棲める山のために

そして、その視線は、イヌワシの生息環境にも向けられています。南三陸地域は 4 ペアものイヌワシが繁殖する日本有数の生息地でしたが、近年は危機的な状況にあります。その原因の一つとして、人工林の管理不足があります。木が混み合い、イヌワシが狩りをしやすい開けた山が減ってしまったのです。

この状況を踏まえ、東北森林管理局、南三陸町、登米市、株式会社佐久が、南三陸地域のイヌワシが生息・繁殖できる山林環境の再生と持続可能な林業振興の両立を目的に「南三陸地域森林整備推進協定」を 2020 年 3 月に締結しました。

国有林・市町有林・民有林が連携するこうした取り組みは日本で初めて。新しい林業のあり方が、この地域から生まれているのです。

南三陸町の FSC 山林における作業風景



南三陸地域を中心とした

イヌワシ関連年表



「翁倉山のイヌワシ」、立花繁信、宮城県文化財保護協会、1984 「田中完一著作集Ⅰ～Ⅲ」、三陸文学研究社、1994～1995 「南三陸ワシタカ研究会調査年報」などを参考に作成しました。



郷土のナチュラリスト1
熊谷三郎
（くまがい・さぶろう）
明治29年、岩手県一関市に豪商・熊文（くまぶん）の跡取りとして生まれる。鳥類学を志して上京、黒田長禮に師事、山島芳麿や峰須賀正、初山徳太郎といった鳥類学者と交流する。帰郷後は宮城県栗原郡若柳町（現栗原市）に住み、日本野鳥の会仙台支部（現宮城県支部）の初代支部長を務め、調査研究及び後進の育成に努める。立花繁信氏とは昭和21年からの知己であった。昭和29年、鳥類保護の講演中に急逝。



郷土のナチュラリスト2
田中 完一
（たなか・さだかず）
大正12年、宮城県本吉郡志津川町に開業医の長男として生まれる。日大医学部を卒業した昭和23年に肺結核を発症、生死の境をさまようも、昭和26年、志津川町に帰郷し療養しつつ医業を手伝う。昭和28年、熊谷三郎氏の訪問を受け、自然愛護における青少年教育の重要性について夜明けまで語り合う。同年、小中学生を対象とした志津川愛鳥会を創設。医業の傍ら、地域の子どもたちに自然愛護の種を植え付け続ける。昭和60年、逝去。

日本のイヌワシ研究の先駆者

～立花繁信先生について～

鈴木 卓也（すずき・たくや）

石巻市と登米市の境にある翁倉山（標高 531.4 m）は、日本で3番目にイヌワシの繁殖が報告された場所です。明治・大正期の日本の鳥類学はイヌワシの繁殖を確認することができず、昭和に入ってようやく長野県の山岳地帯でニカ所の巣が見つかりました。そのためイヌワシは人里離れた高山の鳥とされましたが、その常識を覆したのが、立花繁信先生です。

先生は昭和3年、宮城県桃生郡飯野川町（現石巻市）生まれ。昭和21年の飯野川国民学校（後の河北町立飯野川第一小学校）を皮切りに、志津川町立志津川小学校、河北町立



1987年5月17日、翁倉山中で保護されたイヌワシの巣立ちピナと立花先生。衰弱していたこのイヌワシはその後、仙台市八木山動物公園に保護収容された。



大川第二小学校、同大川第一小学校、河南町立広瀬小学校、河北町立大谷地小学校の教諭を歴任されました。生物学者を志すも、戦争による混乱で学問の道に進むことができなかった先生は、教員生活のかたわら、郷里の野生動物の調査研究に情熱を注ぎます。

昭和30年の春、翁倉山の麓で「真っ黒くて大きな鳥」を飼っている少年がいると聞いて訪ねた先生は、それがイヌワシの幼鳥であることを確認しました。「山で見つけた大きな巣から、弟とふたりで木登りして捕まえてきた」という少年の話から、日本で3番目、戦後では初となるイヌワシの繁殖巣の発見に繋がったのでした。

先生はその後、翁倉山をフィールドにイヌワシの生態を詳しく研究し、それが高く評価され、昭和45年に日本鳥学会賞を受賞します。その業績は、令和2年に先生が亡くなられた現在も、全国の多くのイヌワシ研究者や関係者に受け継がれています。

あとがき

絵本「イヌワシの棲む山」は、南三陸を山から動かすプロジェクト『山さ、ございん』の一環として作成され、同ウェブサイト上で2016年から公開してきたものです。今回これを全面的に改訂し、資料ページを加えて印刷本として刊行することになりました。

ふるさとの山にイヌワシが棲むことは、人の暮らしと自然の営みの幸福な調和の象徴であり、それを可能にしてきた先人たちの知恵を学び未来へ活かすことでもあります。

本書が多くの方の、特に未来を担う子どもたちの手元に届くことを願います。

■参考文献

『翁倉山のイヌワシ』立花繁信、宮城県文化財保護協会、1984
『イヌワシの保全と生態』ジェフ・フトソン、山岸哲・浅井芝樹訳、文一総合出版、2006
『森の生態史一北上山地の景観とその成り立ち』大住克博・杉田久志・池田重人 編、古今書院、2005
日本イヌワシ研究会 オフィシャルサイト <http://srge.info/>（2021年4月閲覧）
南三陸ワシタカ研究会調査年報 1997-2019
イヌワシの棲む山―一人為と自然の狭間に― 鈴木卓也、東北学院大学東北文化研究所紀要、2008

その他、各市町村誌、郡誌などを参考にさせていただきました。

■謝辞

本書執筆にあたって、故・立花繁信様より、南三陸地域のイヌワシの生態や歴史について、多くの貴重なお話を聞かせていただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。
また、奥様である立花節子様、長女である立花倫子様には、資料確認や写真のご提供など、多くのお骨折りをいただきました。心から感謝申し上げます。
ご後援いただいた南三陸町様及び南三陸町教育委員会様、資金面でご助成いただいたバタゴニア日本支社様、旧版作成時から支えていただいた『山さ、ございん』メンバーの皆さまはじめ、ご協力いただきましたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

イヌワシの棲む山

2021（令和3）年6月25日 発行

『イヌワシの棲む山』製作委員会

宮城県本吉郡南三陸町志津川字天王前 205-12 南三陸ネイチャーセンター友の会事務局

電話：0226-46-2037 e-mail：info@m-inuwashi.jp

代表：佐藤太一（株式会社佐久・南三陸森林管理協議会）

文：鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）

作画：西澤真樹子（認定NPO法人大阪自然史センター）

編集：水谷典雄（Office WORDS）

協力：南三陸町・南三陸町教育委員会

＊非売品

＊本書は2020年度バタゴニア社の環境助成金プログラムの助成を受け製作されました。

＊本書内容の著作権は鈴木卓也・西澤真樹子に属します。

＊教育目的での利用を除き、許可なく複写・複製・引用することを禁じます。





発行：南三陸ネイチャーセンター友の会